

ものづくり産業を支える仲間たち④3

富士電機株式会社 川崎工場

富士電機は、富士電機製造株式会社として1923(大正12)年に操業、1925(大正14)年には川崎工場が操業を開始し、もうすぐ100周年を迎える。

今回訪れた川崎工場が富士電機発祥の地であり、発電プラント事業のマザー工場の機能を備えている。川崎工場は田辺地区と白石地区からなり、敷地面積は17万㎡。白石地区には1999年に新工場が完成し、発電設備の主工場となっている。工場では火力発電、地熱発電、水力発電、原子力発電等の発電プラント関連周辺機器を設計・製作・建設・試運転・アフターサービスまでを一貫して提供している。また、100kW発電可能なリン酸形燃料電池も製造している。この電池は水素と酸素により水をつくる過程で生じる



蒸気タービンロータの翼植え作業の様子



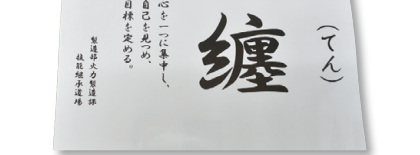
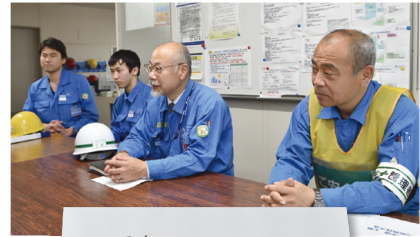
蒸気タービン弁の組立調整の様子

電気を取り出す装置で、病院など電気が止まると支障のある施設などで利用されているとのこと。

表紙の写真は、火力製造課の蒸気タービン組立工場内での『ロータ翼植え作業』の様子。右側で赤いヘルメットの社員が作業を食い入るように見つめているが、彼は入社2年目の進藤さん。現在、先輩から技能を学んでいるところである。ハンマーを使い、全部で5,256枚にもなる様々な形状の翼を一枚一枚手作業で植え込んでいく作業。0.01mmでの微妙な調整が必要であり、熟練の技術が要求される。火力製造課は団塊の世代の退職などに伴い、川崎工場の中でも若い世代が中心の職場であるため、技能伝承は必須課題となっているとのこと。そのため、10年前から『技術継承センター』を設置し、若手の技術・技能の習得と中堅の多能化、リーダーの育成に力を入れている。以前は一人前のタービン職人になるためには最低10年はかかると言われていたが、現在は5~7年を目標にしている。

まず、入社1年目は埼玉の訓練所で基礎を学ぶ。その後川崎塾という学びの場を2か月経験した後、正式部署に配属、技能伝承者の指導の元、技術を習得していく。技能伝承者はベテラン社員ではなく、少し年上の先輩が担当が、教える側も教えることによって学ぶことも多いという。また、工場内には『技能継承道場』が設けられており、各々特徴のある名がつけられている。火力製造課では道場の名は『纏(てん)』。この技能継承道場での学びと、OJTをうまく絡ませながら技能の伝承を行っている。

現場では、年初に製造主任や作業長がその人の技量を見極めた上で、今年度末までの目標を設定しながら技術継承活動を行っている。技能伝承を受ける社員は毎月活動報告書を作成、伝承者と所属長が確認・評価をする。評価は1から7段階で点数化し、誰がどこまで進んでいるか一目で把握できるようになっているという。報告書には学



上：技能継承について説明する(右から)川上火力製造課長、佐藤技能継承センター長、他
下：技能継承道場に「心一つに集中し、自己を見つめ、目標を定める」の文字が

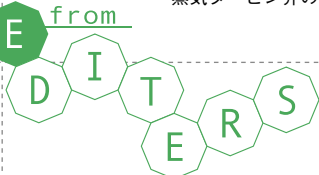
んだ技術の内容、その中で学んだ勤やコツ、安全に関する注意事項など現場で実習した内容をまとめており、技能伝承者とのコミュニケーションツールにもなっているとのこと。さらに、報告書として文字を起すことにより気づきもあるという。それも報告書を作成する「ねらい」の一つ。

また、半年に一度、技能伝承の報告会や技能競技大会も行う。報告会や技能競技大会の結果は成長を実感できる機会となり、向上心にもつながっているという。実際に若手社員の方にお聞きしたところ、「始めたころは初めて触る器具もあったので、使い方を覚えるのに必死でした。下期の競技種目は精密測定という精度と速さを求めるものでしたが、自分は何より精度を重視して練習をしました。結果、工場全体で3位になり、練習の成果を出せたのではないかと思います。」とのこと。

「まだまだ課題もあります。現場だけに教育を任せるのではなく、ヒアリングしながら技術継承センターとしてより良い方法を絶えず考え、より良いシステムにしていく努力が必要だと思っています。」との技術継承センター長の言葉に、現場を支える技能伝承に対する熱い思いを感じた。

い。お恥ずかしい話である。近頃、地方議員のなり手が少なく、欠員がでている地方議会もあるという。巻頭言にもあるように、これから日本は人口が減少していく。議会も人口減に備え、どうあるべきか考える時期に来ているのだろう。◆約1年前だったのだろうか。アパートの隣の部屋に東南アジア(どの国かは不明)から来たらしい若者が3人住み始めた。技能実習生のような。時々、廊下で顔を合わせると人懐っこい笑顔で「おはよう

ございます」と挨拶してくれた。4月下旬、隣の部屋は夜遅くまで大騒ぎ。大音量の音楽と共に歌声が聞こえた。迷惑だなあと思っていたら、数日後、人気がなくなった。実習期間が終わって国に帰ったようだ。日本での生活をどう思ったのだろう。これから、今以上に外国人労働者が増える。異国から来た人を労働力としてではなく、同じ「人間」として受け入れる日本でありたい。(智)



◆今年は参議院議員選挙と統一地方選挙が重なる12年に一度のビッグイヤー。4月上旬に投票所入場券が届いて初めて、私が住んでいる県でも県議会議員選挙があることに気付いた。現職議員の顔も良く知らない。定数もすぐには答えられな

SPRING
issue
[春号]